

小浜島の染織概観

與那嶺 一 子*

Overview of the Dyeing and Weaving in Kohamajima Island

Ichiko YONAMINE*

はじめに

琉球王国時代、成人男女は米や織物等の納税が割り賦られていた。八重山嶋（八重山群島のこと）では特に上布を賦課され、廃藩置県後の地租改正まで貢納が義務付けられていた。その後、かつての税（貢布）は、伝統産業として、その技術は受け継がれ、「八重山上布」の名で、今日まで、織り続けられている。残された史料^(註1)から、八重山の島々では上布、縮布、芭蕉布、木綿布などが織られていたことがわかっており、小浜島でも例外なく、15歳～50歳までの男女に対し、定納布として上布、中布、下布などが割り当てられていた。これらの織物が、どのように割り振られ、どのような技術であったのか、史料からは見えてこないが、小浜島に伝わる織物やその技術からは、その姿の片鱗をみることができ

る。貢納を解かれた後、これらの織物の一部（上布）は石垣島の上布産業の中に組み込まれ、継続することになるが、小浜島における染織の特徴は、島内の祭りを彩る染織品として、島の生活の中で使われ、その技術を今日まで伝えていることである。今回、小浜島の調査で得た結果として、大正～昭和初期、現在の状況も含めて、小浜島の染織の姿を次のとおり報告したい。

調査の時期と方法

調査は平成13年1月15日～17日（一回目）、平成14年3月15日～17日（二回目）の2回、小浜島に現存する染織品の調査と染織技術に係わる調査を行った。

染織品調査は、小浜民俗資料館、大嵩昭氏宅、花城キミ氏宅、稲福ウメ氏宅の4ヶ所で撮影と実測を行った。その結果、「小浜島に残る染織品一覧」の通り19件の染織品が確認できた。また、この一覧には、小浜島の染織を俯瞰するために、小浜島で製織された資料と、小浜島以外で織られ、縫製され、小浜島に伝わる資料等も含めた。また、調査時間の不足により、詳細調査ができなかった染織品は、その名称と素材、技法等の概略を一覧の中で紹介した。二回という限られた調査であったので、沖縄県教育委員会が実施した「県内所在染織品調査」^(註2)で調査済みの小浜島の染織品（平成7年1月調査）については、今回、調査を省いたが、一覧では、小浜島の染織の全体像を知る意味で、「県内所在染織品調査」の染織品のデータも加え28件を報告した。

染織技術調査では、大嵩昭氏、花城キミ氏、慶田盛英子氏、白保シズ氏、宮良キミ氏^(註3)から、聞き取りし、主に繊維素材、染料素材、染色方法等の調査を行った。藍製造と染色の技術は、小浜島に長く伝わる方法で、現在も藍造りが行われていることが確認できた。繊維、染料植物の生育の様子も撮影で

※ 〒900-0029 沖縄県那覇市旭町1番地（県南部合同庁舎8階）沖縄県教育庁文化施設建設室

* Cultural Facilities Construction Office, Education Department, Okinawa Prefectural Government, 1 Asahi-machi, Naha, Okinawa 900-0029, Japan

きた。

調査には、赤嶺新子氏（調査時：沖縄県立博物館臨任／平成13年）、山川暁氏（京都国立博物館研究員／平成14年）が同行、両氏より協力を得た。

調査の結果

結果を述べる前に、八重山地方の賦課された貢布について少し触れたい。貢布はカナイ（貢納）布と呼ばれ、それには、「御用布（グイフ）」と「定納（ジョウノウ）」の二種類があるが、それらがどのように賦課され、どのように織り納められたか詳細は不明である。定納布は白上布、白中布、白下布等で、紺嶋上布、赤嶋上布等は御用布であった^(註4)。廃藩置県後も継続していた貢納の制度は、明治36年（1903）の廃止から百年が経過しており、これについての聞き取りを行う事はできなかったが、織物技術の調査や残された染織品により、大正～昭和初期まで小浜島では、芭蕉、苧麻、木綿、絹の繊維素材が使われ、藍、クール、フクギ等の植物により染色が施され、縞、緋、花織が織られていたことが確認できた。また、その現状についても確認を得た。小浜島に伝わる紅型の踊り衣裳や舞台幕は、当時の紅型技術や用途を知る手がかりとなるものである。

また、沖縄に舶載され、小浜島に伝わる染織品からは、小浜島の役人達がどのような染織品を身につけていたかをうかがい知ることができる。

今回の調査では、特に、小浜民俗資料館、稲福ウメ氏、大嵩昭氏、花城キミ氏、慶田盛英子氏、宮良キヨ氏、白保シズ氏のご協力を得たことを記してお礼申しあげる。

繊維素材

史料^(註5)によると、小浜島に賦課された貢布には「白上布、白中布、白下布」「木綿布、縮布」等とあり、苧麻、木綿の繊維素材があった事がわかる。また、賦課された定納布や御用布には「芭蕉布」の名はみられないが、『与世山親方農務帳』^(註6)には、芭蕉布の栽培方法が記されており、また「沖縄縣八重山嶋統計一覽略」^(註7)（明治25年）には「小浜島の産物」として「芭蕉布 205反」とあり、芭蕉も小浜島に長くから伝わる繊維素材のひとつであった。

苧麻と芭蕉の糸績みの方法は、経糸用の繊維を二つに割り双方を縫り繋いでいく方法と、一本の繊維を縫り倒しながら繋いでいく方法の二つが確認できた。

1) 苧麻

苧麻は葉裏の白い、竹富苧（タケトミブ）と呼ばれる種類で、屋敷内や集落外にある畑で栽培されていた。現在も糸績みが行われ、島の祭などで着用する衣装を織る素材である。大正年間、八重山上布において台湾麻を使っていた時期があり^(註8)、小浜島でも台湾から繊維を買い取り、糸を績んでいた。白地の苧麻織物（グンボウなども）は、大正末から昭和初め頃までは、海晒しが行われていた。上布仕上げの砧打ちも大正期頃までは行われていた（大嵩氏談）。

苧麻は、経緯とも同素材の場合の他に、木綿や絹、芭蕉などとの交織で反物が織られる場合もあり、小浜島では、換金の上布は勿論、家族のための着物が現在も織られ続けている。祭祀を司る神女のうち、ウツカサ（本ツカサ）の側に仕えるツカサの衣装は苧麻による（資料No12）。

2) 芭蕉

繊維を取る糸芭蕉（リュウキユウバシヨウ）は、苧麻同様に屋敷の裏側や集落外の畑で確認された。現在は、自然に育つ糸芭蕉から繊維を得る場合もあり、芭蕉糸の全てが栽培によるものではない。芭蕉布は、男性の黒い衣装（資料No3、4、13）やウツカサの衣装（資料No11）に使用されていた。

3) 木綿

今回の調査の結果、木綿の栽培と糸作りの技術は途絶えていたが、終戦後まで行われていた事を確認できた。栽培された木綿は綿繰り機（パナホーシヤマ）で種と繊維に分けられ、綿打ち用の弓で弾きながら不純物を除き綿を作る。その後、糸を紡ぎ、染色を施し布を織る一連の作業が行われていた（大嵩氏談）。また、バナヌヌ（木綿花織）も確認できた（資料No9）。この染織品はウツカサが着用したものであるが、バナヌヌは貢布として賦課される反物の一つでもあった^(註9)。

4) 絹

養蚕は、戦前まで行われていた。石垣島や本島の那覇で養蚕講習を受けた後、島内で養蚕を行い、座

繰りによる糸取りを行っている。桑木は屋敷内に植えられていた。養蚕の主な目的は、他の八重山の島々と同様に繭出しであったと思われるが、自家用に織った反物で着物を仕立てた例もあったようだ。また、玉繭などは四角い真綿を作り換金していた（大嵩氏、花城氏談）。

帕（資料No 6、14）や大帯（資料No 2）には絹糸が使われているが、これは小浜島で繰糸されたものではない。

染料素材と染色

史料^(註10)によると、八重山地方で使われた染料は「楊梅皮」「くうる根」「紅花」「藍」となる。明治以後の染料植物については、『八重山生活誌』^(註11)に「藍、紅露（クール）、タラーハナ（紅花）、フクヌカー（福木の皮）、うっきん（鬱金）、ムンガー（楊梅皮）、ピキニー（ひる木）、トゥカージ（車輪梅）」と種類が述べられている。今回の調査では、藍、クール、ヒルギ、フクギの利用が確認された。少ない例だが、田泥による媒染等も行われていた。

藍：

小浜島では、ナンバンコマツナギ、タイワンコマツナギの二種類の豆科の植物を使い藍造りと染色が行われている。この藍は琉球藍、蓼藍に対してインド藍と一般に呼ばれている。この藍について、小浜島特有の呼称はない。大嵩氏の母親（明治20年代生まれ）や祖母（明治10年代生まれ）、慶田盛氏の祖母（明治10年代生まれ）の世代も藍造りをしており、王府時代の末期には既に現在と同様の藍造りが行われていたものと思われる。現在、藍造りを行っているのは大嵩氏、花城氏、成底氏、慶田城氏、大工氏、黒島氏、宮良氏、慶田盛氏など数名いるが、常に行っているのは、大嵩氏、花城氏、慶田盛氏、宮良氏であった。また、琉球藍の導入や需要の減少により、藍造りそのものも減ってきている。藍造りは、各個人によって、微妙に異なるが、基本的な製造方法と藍建て、染色方法を記しておく。藍造りは、かつては甕を用いていたが、現在は、ポリバケツで行われている。

【基本的な藍造り方法】

① 枝ごと藍葉を刈り取る。葉の付いていない枝の

部分を切り落とす。

- ② 藍葉を容器に詰め込み、水を加える。
- ③ 一昼夜（18～24時間）おいて、発酵すると、藍葉を両手で絞りながら藍汁を出し、葉を取り除く。
この作業は琉球藍製造ではみられない工程である。
- ④ この後、藍汁に石灰を投入し攪拌を行う。小さい容器で液を高く持ち上げながら攪拌する作業は液の色が黄色から紺色に変わるまでの、20～30分程度行う。
- ⑤ 攪拌後、翌日まで静置すると、藍の色素は石灰と化合し、容器の底に沈殿する。その上澄み液を捨て、沈殿した泥上の藍玉を別の容器に移しかえる。この作業を繰り返して、染色に必要な一定量をつくる。

【藍建てと染色方法】

このようにして精製された藍は、染色のため、ガジュマルを焼いた木灰といっしょに水に入れ、藍建てを行う。その最に、琉球藍の藍建てで行われる泡盛や水飴等を入れる作業は全く行われぬ。藍がうまく建たない場合は、容器に直接藍葉を追加して入れる。藍葉の入れ方は個人によって異なる。

小浜島の祭り衣装に欠くことのできない黒に近い濃紺の色は3～4回の染色で得られ、芭蕉の根、アコウ、アクツの木の皮を煎じ、その液に浸し色止めを行う。

織の技法

小浜島で織られたと思われる「白上布、白中布、白下布」や「紺嶋細上布、赤嶋細上布」は平織であり、史料のみで確認される「縮布」も平織である。今回、資料として確認できたパナヌヌ（木綿花織／資料No 9）は、平織の地組織が浮く両面浮花織である。

かつて、御用布として一年間に賦課された五反には、白布、赤縞、紺縞、カナイ布、パナ布があったと言われ^(註9)、このような花織布も含まれていたと思われる。小浜島では、現在、花織の技法は伝承されておらず、平織のみが受け継がれている。

織の模様

小浜島に残されている染織品は、紺、浅葱色或いは生成の無地、経縞模様、格子縞模様、格子縞に緯縞模様、経縞模様であった。

「聞き書き 御用布物語」^(註9)によると「柄はピタマ、メヌハナ、アカスマメヌハナ、コンスマメヌハナ」とある。「アカスマ」「コンスマ」は史料の「赤嶋、紺嶋」の意であろうと思われる。

史料^(註12)には、「赤苧地紺嶋赤島交布、紺地紺嶋赤島交布、水色地紺嶋赤島交布、赤苧地紺嶋布、赤苧地ニ赤嶋布」等の織物名もみられ、ここでいう「嶋」または「島」は「縞模様」の事ではなく、「縞」も含めた模様の意味だと解釈される。それによると「赤苧地紺嶋赤島交布」は、桃色地に紺や赤茶の縞模様という意味になる。「赤嶋」「紺嶋」はおそらく、白地茶縞、白地紺縞の事ではないかと思われる。史料からは、様々な色や縞模様の上布が織られていた事が推察されるが、王府末期には白地に紺や赤茶の縞上布が盛んに織られていた様子がうかがえる。

現在、小浜島で織られる織物の大半は、無地、縞が殆どで、縞は経縞或いは緯縞のみの模様で、かつての複雑な縞模様は織られていない。

註1 「酉年定納布并年貢割符 仕上世座」(翻刻：玻名城泰雄)

「八重山人頭税賦課台帳」新本家文書

P72 宮城文『八重山生活誌』昭和48年

「聞き書き 御用布物語」『八重山文化 第3号』東京・八重山文化研究会 昭和50年

註2 P157、176、177「沖縄県史料調査シリーズ 第1集 沖縄県文化財調査報告書第126集 沖縄の染織 (I) 染織品編」沖縄県教育委員会 平成9年

註3 大嵩昭：大正2年生 旧姓花城／平成15年1月、平成16年3月調査

花城キミ：大正14年生 旧姓登野／平成15年1月、平成16年3月調査

慶田盛英子：昭和6年生 旧姓大久／平成15年1月、平成16年3月調査

白保シズ：明治40年生／平成15年1月調査

宮良キヨ：旧姓花城 大嵩氏妹／平成16年3月調査

註4 「酉年定納布并年貢割符 仕上世座」(翻刻：玻名城泰雄)

P72 宮城文『八重山生活誌』昭和48年

「聞き書き 御用布物語」『八重山文化 第3号』東京・八重山文化研究会 昭和50年

「富川親方八重山島御用布座公事帳」

註5 「酉年定納布并年貢割符 仕上世座」(翻刻：玻名城泰雄)

註6 「与世山親方八重山嶋農務帳」

註7 「沖縄縣八重山嶋統計一覽略」(明治25年)：織物の欄に苧布(97反)木綿布(134反)芭蕉布(205反)とある。

註8 「八重山上布の勁敵が現はれる」八新 大正11年8月1日(「史料編 新聞集成」『竹富町史 第11巻』平成7年)：

「一略一 価格の低下を計り競争に応ぜんとして台湾麻を使用する為め品質低下の傾向となった」

註9 松原オナリ「聞き書き 御用布物語」『八重山文化 第3号』東京・八重山文化研究会 昭和50年

註10 「富川親方八重山嶋仕上世例帳」

註11 P86宮城文『八重山生活誌』昭和48年

註12 「与世山親方八重山嶋公事帳」1890年(翻刻：玻名城泰雄)

小浜島の染織品一覧

平成14年3月現在

No	資料名	繊維	織技法	染技法	形態	産地	所蔵先	
1	木綿紺地カカン	木綿	平織	糸染（藍）	下裳 （カカン）	舶載品か	稲福義男	*
2	大帯	絹	経五枚縺子	糸染	帯	舶載品か	稲福義男	*
3	芭蕉紺地着物（朝衣）	芭蕉	平織	糸染	着物（男物）	不詳	稲福義男	
4	芭蕉紺地着物（朝衣）	芭蕉	平織	糸染	琉装の着物	不詳	大嵩昭	*
5	木綿仕立帯	木綿	平織	糸染（藍）	帯	不詳	大嵩昭	*
6	帕	絹	平織（縮緬）	糸染（朱）	帕	舶載品か	大嵩昭	*
7	木綿芭蕉経縺着物	木綿・芭蕉	平織	糸染（藍）	着物	小浜島	大嵩昭	
8	苧麻紺地着物	苧麻	平織	糸染（藍）	着物	小浜島	大嵩昭	*
9	木綿紺地花織スディナ	木綿	両面浮花織	糸染（藍）	胴衣 （スディナ）	小浜島	小浜民俗資料館	*
10	木綿白地下裳（カカン）	木綿	平織	白無地	下裳 （カカン）	小浜島	小浜民俗資料館	*
11	芭蕉着物	木綿	平織	白無地	琉装の着物	小浜島	小浜民俗資料館	
12	苧麻白地格子に緯縺着物	苧麻	平織・格子	糸染	着物	小浜島	小浜民俗資料館	
13	芭蕉紺地着物	芭蕉	平織	糸染（藍）	琉装の着物	小浜島	小浜民俗資料館	
14	帕	絹	平織（縮緬）	糸染（赤紫）	帕	舶載品か	小浜民俗資料館	
15	苧麻型付着物	苧麻	平織	型染	着物	生地は小浜か	花城キミ	*
16	木綿浅地着物	木綿	平織	糸染（藍）	着物	小浜島	花城キミ	*
17	苧麻紺地着物	苧麻	平織	糸染（藍）	着物	小浜島	花城キミ	*
18	木綿紺地縺（経縺）着物	木綿	平織・経縺	糸染（縺）	着物	小浜島	花城キミ	*
19	芭蕉無地着物	芭蕉	平織	白無地	着物	小浜島	花城キミ	
20	木綿花色地震枝垂桜文様紅型衣裳	木綿	平織	型染	琉装の着物	不詳	小浜南部落	*
21	木綿花色地震枝垂桜文様紅型衣裳	木綿	平織	型染	琉装の着物	不詳	小浜南部落	
22	木綿黄色地牡丹桐鳳凰文様紅型衣裳	木綿	平織	型染	琉装の着物	不詳	小浜南部落	
23	木綿黄色地牡丹桐鳳凰文様紅型衣裳	木綿	平織	型染	琉装の着物	不詳	小浜南部落	
24	苧麻紺地丸文様松竹梅文様紅型舞台幕	苧麻	平織	筒描き	幕	不詳	小浜南部落	
25	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	苧麻	平織	筒描き	幕	不詳	小浜南部落	*
26	木綿花色地松竹梅流水文様紅型衣裳	木綿	平織	型染	琉装の着物	不詳	小浜北部落	*
27	木綿花色地松竹梅流水文様紅型衣裳	木綿	平織	型染	琉装の着物	不詳	小浜北部落	
28	苧麻紺地松竹梅鶴亀文様紅型舞台幕	苧麻	平織	筒描き	幕	不詳	小浜北部落	

凡例

- この一覧は、平成14年3月までに確認された小浜島の染織品である。
- 資料No1～19は、平成13年、14年の調査結果である。
- 資料No20～28は平成7年、沖縄県教育庁文化課が行った県内染織品所在調査の結果である。
- 数量は、一点。寸法の単位はcm
- *印の資料は、次ページで写真と詳細データを掲載
- 織密度は1cm間の経糸、緯糸の本数で、タテ×ヨコで示した。

附) 染織品の図版とデータ

資料 No : 1

資料名称: 木綿紺地カカン

寸法: 丈89.3 胴回り102.6

繊維素材: 木綿

織技法: 平織 (織密度: 19×11)

染技法: 糸染 (藍)

形態: 下裳 (カカン)

所蔵: 稲福義男

備考: 南風川田於奈利着用。仕立ては七枚剥ぎ。一枚は布幅の半分。布幅107.2cm。布幅が大きく舶載品の可能性がある。

紐には次の三種類の布が使われている。

①浅地苧麻 (甘いZ撚り)

②木綿格子縞 (経緯ともZ撚り)

③型染 (糊防染・浸染/経緯とも木綿のS撚り/文様: 市松、斜格子のあられ)



資料 No : 2

資料名称: 大帯

寸法: 幅15.0 長さ436.0

繊維素材: 絹

織技法: 経五枚縞子

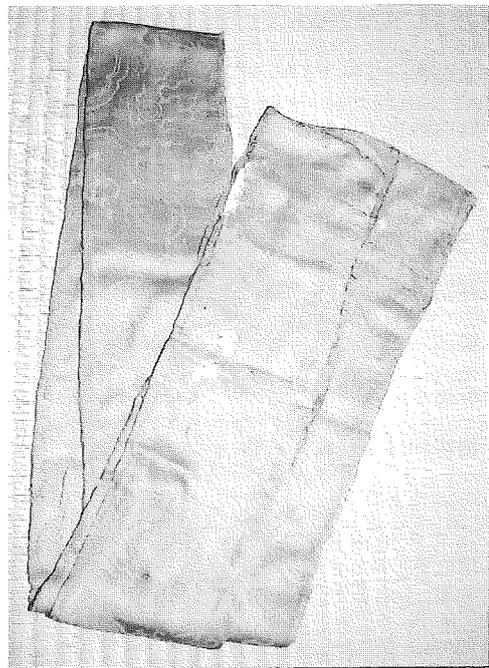
染技法: 糸染 (染料は不詳)

形態: 帯

所蔵: 稲福義男

備考: 竹富町指定有形文化財

帯の芯は白の苧麻布。幅30cmの緞子を半分に折り、輪にして縫製。緞子は片方は織り耳、もう一方は裁ち目であるため布幅は不明。文様は瑞雲に四爪龍。緞子は舶載品。



資料 No : 4

資料名称: 芭蕉紺地着物 (朝衣)

寸法: 丈136.9 衿71.8

繊維素材: 芭蕉

織技法: 平織 (織密度: 28×13)

染技法: 糸染 (藍)

形態: 琉装仕立の着物

所蔵: 大嵩昭

備考: 小浜島で織られたものかどうか不明。着物は王府時代の男性の正装で、帕 (資料No 6) を被る際に着用。



資料 No : 5

資料名称 : 木綿仕立帯

寸 法 : 幅15.6 長さ170.6

繊維素材 : 木綿

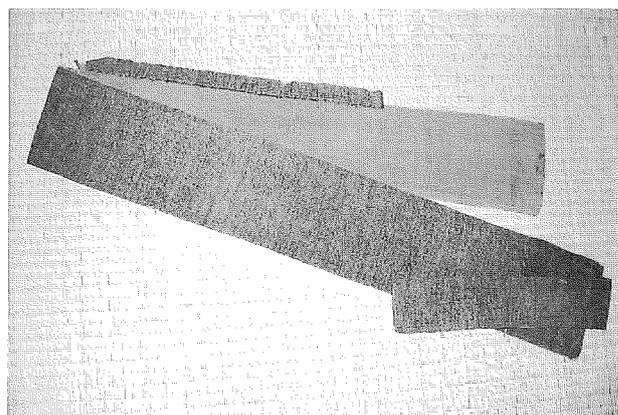
織 技 法 : 平織 (織密度 : 22×15)

染 技 法 : 糸染 (藍)

形 態 : 仕立帯

所 蔵 : 大嵩昭

備 考 : 小浜島で織られたものかどうか不明。



資料 No : 6

資料名称 : 帕

寸 法 : 頭19.4×20.8 高さ7.7

繊維素材 : 絹

織 技 法 : 平織 (縮緬)

染 技 法 : 糸染 (朱)

形 態 : 帕

所 蔵 : 大嵩昭

備 考 : 大嵩家の四代前の加武多寿 (カブター : 享年88歳) が筑登之の位に就いたときに被ったもの。保存状態が悪く、竹を組んで作られる天の芯は欠損し、布帛は底に落ち込む。後頭部下の襷状部分は芯となる板ごとはずれている。



資料 No : 8

資料名称 : 苧麻紺地着物

寸 法 : 丈121.5 衿59.8

繊維素材 : 苧麻

織 技 法 : 平織 (織密度 : 14×14)

染 技 法 : 糸染 (藍)

形 態 : 着物 (和服仕立)

所 蔵 : 大嵩昭

備 考 : クンジのブーキン。大嵩氏が藍染めし製織。戦前 (昭和初期)、主人のために仕立てたもの。



資料 No : 9

資料名称：木綿紺地花織スディナ

寸法：丈123.0 衿57.0

繊維素材：木綿（手紡ぎの単糸：Z撚）

織技法：両面浮花織（織密度：26×19）

染技法：糸染（藍）

形態：胴衣（スディナ）

所蔵：小浜民俗資料館

備考：明治末～大正期。慶田盛正光氏祖母（ウーツカサ：祭祀を司る）が着用。スディナは八重山地方に見られる長めの胴衣のことで、下裳（カカン）と対で着用する。潤年の祭祀の最に紺地のスディナとカカンを着用。

木綿糸は手紡ぎの単糸で小浜島にて紡がれたものと思われる。



資料 No : 10

資料名称：木綿白地下裳（カカン）

寸法：丈87.5 胴廻り97.0

繊維素材：木綿

織技法：平織

染技法：白無地

形態：下裳（カカン）

所蔵：小浜民俗資料館

備考：明治末～大正期。慶田盛盛光氏の祖母（ウーツカサ：祭祀を司る）が着用。資料No9のスディナと対をなして着用。幅33.5～34.5cmの布を12枚継いで仕立てられる。裾回りは395.0cm。



資料 No : 15

資料名称：苧麻型付着物（カタチキ）

寸法：丈112.0 衿64.0

繊維素材：苧麻

織技法：平織（織密度：18×12）

染技法：型染（白地型）

形態：着物

所蔵：花城キミ

備考：花城氏の実母、登野貞氏（小浜島佐久伊嶽のツカサ）の旧蔵品。戦前のもの。布は小浜島で糸績みされ、製織され、型染は沖縄本島で行ったと思われる（花城氏談）。仕立ては和琉折衷。



資料 No : 16

資料名称 : 木綿浅地着物

寸法 : 丈129.0 衿70.0

繊維素材 : 木綿

織技法 : 平織 (織密度 : 24×21)

染技法 : 糸染 (藍)

形態 : 着物

所蔵 : 花城キミ

備考 : 花城氏が製織。祝い着。木綿の糸は経緯ともに購入したもの。製造した藍で染色。



資料 No : 17

資料名称 : 苧麻紺地着物

寸法 : 丈136.0 衿65.5

繊維素材 : 苧麻

織技法 : 平織 (織密度 : 14×18)

染技法 : 糸染 (藍)

形態 : 着物

所蔵 : 花城キミ

備考 : 花城氏が製織。豊年祭用の衣装。男性用。製造した藍で染色。



資料 No : 18

資料名称 : 木綿紺地緋 (経緋) 着物

寸法 : 計測なし

繊維素材 : 木綿

織技法 : 平織・経緋 (織密度 : 24×20)

染技法 : 糸染 (緋)

形態 : 着物

所蔵 : 花城キミ

備考 : 花城氏が製織。実母 (登野貞氏) が織った着物と類似の柄。緋名はコトノウマー (琴の馬)。糸は購入したもの。



資料 No : 20

資料名称 : 木綿花色地震枝垂桜文様紅型衣裳

寸 法 : 丈129.0 衿69.0

繊維素材 : 木綿

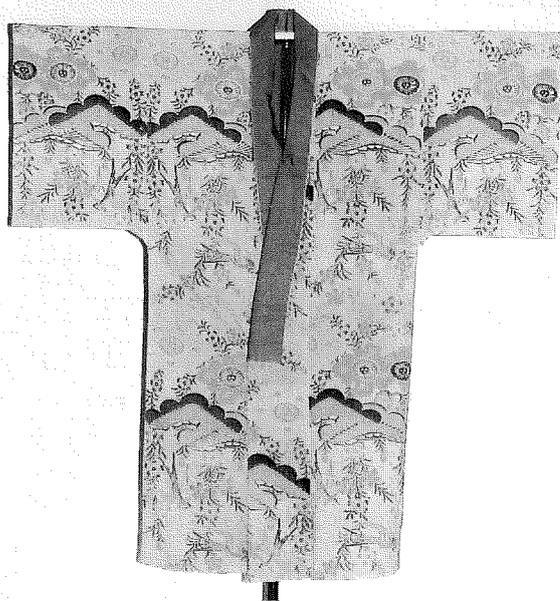
織 技 法 : 平織 (織密度 : 32×19)

染 技 法 : 型染 (白地型)

形 態 : 着物 (琉装仕立)

所 蔵 : 小浜南部落

備 考 : 結願祭の踊り衣裳。片面染。染めは王府時代末期の首里か。裏地は紫地ブロードで、平成5年頃仕立て直す。



資料 No : 25

資料名称 : 苧麻紺地丸文様松竹梅文様紅型舞台幕

寸 法 : 丈189.0 幅477.0

繊維素材 : 苧麻

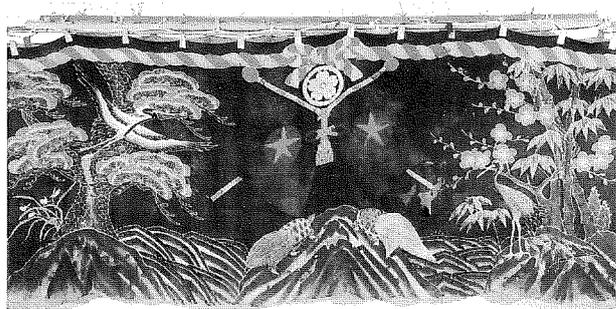
織 技 法 : 平織 (織密度 : 12×10)

染 技 法 : 筒描き

形 態 : 幕

所 蔵 : 小浜南部落

備 考 : 昭和初期に製作。中央の星部分は、日章旗を墨で塗り潰しされてる。戦後、そこは星型に染め直す。最近、再度、元の日丸に染め戻す。資料写真は平成7年のもの。



資料 No : 26

資料名称 : 木綿花色地松竹梅流水文様紅型衣裳 (バティン)

寸 法 : 丈132.0 衿71.5

繊維素材 : 木綿

織 技 法 : 平織 (織密度 : 20×14)

染 技 法 : 型染 (白地型)

形 態 : 着物 (琉装仕立)

所 蔵 : 小浜北部落

備 考 : 結願祭の踊り衣裳 (ウービキ)。染めは王府時代末期の首里か。裏地は濃紺地木綿。高那部落 (西表島) がマラリヤで全滅したので小浜島へ持ち帰ったもの。

